

2号自動式卓上電話機

1927



1927年(昭和2年)

関東大震災以後の復旧を機会に、これまで限界にあった手動交換方式を自動交換方式の導入によって解決することになった。

大正15年1月、初めて東京にA形、横浜にH形の自動交換局が設けられた。

最初の自動式電話機は、それぞれの交換機に付随したものであり、その後の増加分は2号共電式電話機に1号ダイヤルを組み合わせたものであったが、ダイヤルすると受話器に雑音が入る欠点があった。

昭和2年、これを改良した2号ダイヤルを取り付けたA形・H形共用の2号自動式電話機が採用された。

特徴

自動式電話は電圧が48V(H形は60V)と高く、当時、電話機の選定には、かなりの論議を呼んだが、電話機製造の経済化、機種の一統化等の面のできるだけ2号共電式と共通のものを用いることとした。したがって、形態は2号共電式にダイヤルをつけた形となっている。

*同系機種

2号自動式壁掛電話機

3号自動式卓上電話機

1933



1933年(昭和8年)

昭和8年、送・受話器を連結した斬新なスタイルの3号電話機が誕生、以降いろいろな電話機のスタイルの原形となった。

以来、わが国の代表的な標準電話機として約30年にわたって活躍した。

戦後、電話の復旧に標準電話機の生産が間に合わず、応急処置として、メーカーの私設交換機用在庫の中から標準機と同等の性能のものを購入して使用した。これらに“富士形”“イ-661”等があった。

特徴

きょう体にベークライトが初めて使用され、送話器には、炭素粉を使ったソリッドバック形を用い、炭素粉の凝固、低感度を解決するため、防じん・防湿措置のほか、側音防止回路を初めて採用した。

*同系機種

3号自動式壁掛電話機
3号自動式富士形電話機
3号共電式卓上・壁掛電話機
3号磁石式卓上・壁掛電話機

4号自動式卓上電話機

1950



1950年(昭和25年)

戦後、従来の3号電話機の性能をさらに上回る新形電話機の研究開発が進められ、昭和25年、性能、デザインともに世界の水準をしのぐ電話機として、4号自動式電話機が誕生した。

“ハイ・ファイ電話機”といわれるほど感度が高く、そのためケーブルの細芯化にも大きな効果をあげた。

同年、東京・丸の内局等6局で商用試験が行われ27年から本格的な4号化が進められた。

特徴

送・受話器内の振動板を従来の軟鉄振動板から軽量のジュラルミン製を用いて共振周波数を高くし感度をあげている。ケーブルは、従来の最小線径0.5ミリ(1,800対)を0.4ミリ(2,400対)に細芯化することができ、ケーブルの経済化・多対化が可能となった。

*同系機種

4号自動式壁掛電話機
4号共電式卓上・壁掛電話機

23号自動式壁掛電話機

1953



1953年(昭和28年)

昭和25年頃は自動改式当初の2号自動式壁掛電話機が旧形のまま20万台弱使われていた。

しかし、この電話機は、伝送特性が悪く、また、部品材料も旧形のままであったため、昭和28年7月、3号自動式電話機と同一の伝送特性及び品質に改善し、23号自動式電話機として使われた。昭和34年頃から順次淘汰された。

特徴

改善部品は、送話器、誘導線輪、端子板及び回路等である。

*同系機種

23号共電式壁掛電話機

電話料金

	1947年	1948年	1951年	1953年	1962年
市内通話	東京月額基本料 住宅用 75円 事務用 120円 度数料 50銭 (市内通話1度毎)	東京月額基本料 住宅用 300円 事務用 480円 度数料 2円 (市内通話1度毎)	東京月額基本料 住宅用 380円 事務用 540円 度数料 5円 (市内通話1度毎)	東京月額基本料 住宅用 700円 事務用 1,000円 度数料 7円 (市内通話1度毎)	市外通話料に距離別時間差法導入 東京月額基本料 住宅用 700円 事務用 1,000円
市外	東京～大阪間 3分毎に38円	東京～大阪間 3分毎に152円	市外通話は即時扱いと 待時扱いを料金区別		東京～大阪間 4秒7円

600形自動式
卓上電話機

1962



プッシュホン

1969

留守番電話機
レポンスⅢ形

1985



クローバーホン

1987



1962年(昭和37年)

昭和37年3月、東京都下昭島局での商用試験を皮切りに登場した600形電話機は、通話性能と経済性の上で完成された電話機といわれている。その後、全国的な商用試験を経て、昭和38年から全面的な600形電話機の導入が図られ、昭和46年からは、ホワイト、グレー、グリーン3色によるカラー化も始められた。ここに通話機能においてほとんど申し分のない電話機の出現を見ることができた。

特徴

4号電話機の3倍以上も感度が高く、これによりケーブルの細芯化は、さらに0.32ミリ(3,600対)まで可能となった。また、初のプリント配線の導入により信頼性、量産性を増している。デザイン面では送受話器が自然に正しい位置に収まるようにし、また、ダイヤル面もボディに埋め込む等細かい配慮がなされている。

*同系機種

600形自動式壁掛電話機

1969年(昭和44年)

コンピュータの開発は、データ通信という新しい通信分野を生み出した。こうしたコンピュータと連結できる電話機として、通話以外の機能を持つ新しい電話機“プッシュホン”が誕生した。短縮ダイヤル等従来の電話機のイメージを変える機能を持っている。また、昭和47年9月からは、従来のグレーに、ホワイト、グリーン、レッドを加えて4色となった。

特徴

ダイヤリングは、数字ボタンを押すだけでよく、これによって特定の周波数の音声信号を発信し、これが交換機を作動させる。ダイヤル数字のほか、2つの機能ボタンがあり、これは短縮ダイヤル等のキー・ボタンの役を果たす。

*同系機種

プッシュ式ホームテレホン
プッシュ式ビジネスホン

1985年(昭和60年)

昭和60年4月から本電話機が自由化され、自分の好みの電話機を選べるようになり、さまざまな形や機能を持った電話機が登場した。

特徴

「レポンス」は、留守番電話機能を備えた電話機で、応答専用機、マイクロカセットテープ1本の応答録音機、標準カセットテープ2本を使用する応答録音機の3タイプがあった。

1987年(昭和62年)

昭和58年12月から単体電話機のメイン商品としてプッシュホンハウディシリーズを提供してきたが、デザイン重視・OPD電話機及びスイッチャブル電話機が主流である単体電話機市場に対応するため、プッシュホンハウディシリーズの後継機種として、ハウディ・セレクトとともにクローバーホンを5月から発売した。

特徴

シンプル&リーズナブルなデザインに加え、低価格であるため、単体電話機の中でも特に人気がある。タイプには、クローバーホンyou(ヨコ形)とクローバーホンme(タテ形)があり、色はクリアホワイトほか6色と豊富である。機能面では、(1)DP/PBスイッチャブル(2)再ダイヤル(3)着信音量切替(4)保留音送出(ノクターン/メニューット)と簡易な機能で経済化を図り、販売価格は12,800円と手ごろな価格である。

電 話 料 金	1969年	1972年	1976年	1977年	1983年	1985年
	市内通話	級局を5段階とする 東京月額基本料 住宅用 900円 事務用 1,300円	広域時分制の導入 市内通話の料金度数制を 改め時間制(3分)を採用	東京月額基本料 住宅用 1,350円 事務用 1,950円 度数料 10円	東京月額基本料 住宅用 1,800円 事務用 2,600円	
市外			東京～大阪間 4秒10円		東京～大阪間 4.5秒10円	

民営化以降については、本文をご参照ください。